2025-2026 WEEKLY BULLETIN
2月5日(木) 第24号
第2510地区 Rotary 札幌東ロータリークラブ

第3150回 例会

本日のプログラム

日本の子育て文化について

北海道厚生局長　神ノ田昌博 氏

職業奉仕の変化 地区職業奉仕委員長 大坪誠治 氏

改めまして、本日はよろしくお願いいたします。多くの会員の皆さまの前でお話しするのは緊張しますが、今回初めて職業奉仕委員長を務めるにあたり、「職業奉仕は難しい」という印象を少しでも和らげたいと思っています。

私は現在葬祭業に携わっていますが、以前は34年間別の仕事をしていました。母の高齢化に伴い、100年以上続く家業を絶やすわけにはいかないと転職したのがきっかけです。職業奉仕には多様な考え方があり、唯一の正解があるわけではありません。個人の価値観を押し付けるのではなく、それぞれが自分の職業観と向き合うことが大切だと考えています。

ロータリー文庫で「職業奉仕」を検索すると730件、雑誌でも300件近くがヒットします。それほど多様で奥深いテーマですが、今日は「現在の職業奉仕」と「歴史から見る職業奉仕」の二つに分け、できるだけ分かりやすくお話しします。

まず現在の職業奉仕ですが、1927年に名称が定まり、それ以前は「ビジネス」などと呼ばれていました。私は「職業」という言葉より「事業」という表現の方が本質に近いと感じています。My ROTARYには、職業奉仕とは「倫理と高潔さを持ち、社会のニーズに知識やスキルを役立てること」と明確に示されています。職業奉仕入門や行動規範にも、ロータリーの目的第2項を土台とし、職業を高潔なものにすることが職業奉仕であると書かれています。つまり、倫理的行動を実践することが職業奉仕の核心であり、その基本が「四つのテスト」です。

一方、歴史を振り返ると理解が深まります。ロータリーは5人のメンバーから始まり、信頼を基盤としたクラブとして発展しました。初期には「背中をかき合う(バックスクラッチ)」という言葉に象徴されるように、仲間同士が助け合う職業人の親睦団体でした。これを利己的だと批判したのがドナルド・カーターであり、彼を入会させるためにポール・ハリスは社会奉仕を加えたと言われています。

1923年の決議2334では、ロータリーは利己的欲求と奉仕の精神の矛盾を調和させる人生哲学であると示され、二つの標語「Service Above Self」「He Profits Most Who Serves Best」が生まれました。本来は事業拡大と利益追求を倫理的に行うという意味でしたが、現在では「Service Above Self」がボランティア精神として強調され、当初の意図とは少し異なる受け取られ方をしています。

現代では、社会奉仕と職業奉仕の境界が曖昧になっています。例えば、専門家が市民相談に応じる活動は、利益が伴わなければ社会奉仕ですが、その後仕事につながれば職業奉仕とも言えます。海外医療支援も同様で、国際奉仕でありながら職業奉仕でもあります。

ロータリーは単なるボランティア団体ではなく、人格形成と社会貢献を目指す「人生道場」であり、経済学的哲学でもあると言われます。だからこそ職業奉仕は難しく感じられますが、実は皆さんが日々の仕事を誠実に行うことこそが職業奉仕そのものです。人を騙して仕事をしている方はいないはずです。真摯な仕事は社会から評価され、結果として事業の発展につながります。

つまり、利益なき職業奉仕は本来あり得ません。事業を高潔に営み、社会に貢献し、その結果として利益を得る。この循環こそが職業奉仕の本質だと私は考えています。

歴史と現在を照らし合わせると、変わったものと変わらないものが見えてきます。変わらないのは「信頼」「倫理」「高潔さ」。変わったのは「奉仕の捉え方」と「社会との関わり方」です。皆さんが日々の仕事を通じて社会に貢献していること、それこそが職業奉仕の姿なのです。

ご清聴ありがとうございました。

■本日のロータリーソング

君が代、四つのテスト

2025-2026年度
国際ロータリー会長のメッセージ
国際ロータリー会長：フランチェスコ・アレッツォ

よいことの
ために
手を取りあおう